

女子生徒・学生のキャリア教育の可能性

—カリキュラム構成の課題と方向性—

八名 恭子*1・森田 政裕*2

本研究の目的は、キャリア教育が女子生徒・学生の就職及び女性のキャリア形成の現状を十分踏まえたものになっていないこと、女子生徒・学生や、女性の職業観・職業形成意識を十分ふまえたものになっていないことに論及し、学校で行われるべきキャリア教育について検討することである。職業選択だけでなく、結婚や出産などの人生のライフ・イベントで男性より多くの選択肢が与えられている女性が、多くの場合は男女共学である学校生活の中で、自分たちのライフコースの選択肢についてどのように考えていくことが望ましいのかについて、多くの場合は男女共学である学校生活の中で女子生徒・学生に行うキャリア教育のカリキュラムについて、今日の時代背景の中で考えていく。

〈キーワード〉 キャリア教育，女子教育，ワークライフバランス

I 問題と目的

学校教育は、男女の平等を前提に行われているが、一般の社会では男性と女性では成長・発達に差があるだけでなく、社会的な地位や役割、処遇のされ方の違いも大きく、学校において男女を形式的に同一に扱うべきかどうかという疑問がある。

現代の女性の生き方は、時代とともに大きく変化し、1985年に男女雇用機会均等法が成立するなど、女性は様々な権利を獲得し、多様な生き方を選択できるようになり、職場進出もめざましいものとなった。それゆえに、現代の女性は、総合職としてバリバリ働くのか、事務職として結婚あるいは出産時まで腰掛就職するのか、という柔軟な職業コース選択が可能になったと言えると同時に、結婚はするのか、出産はするのか、結婚しても仕事を続けていくのかなど、自分の人生の様々なライフ・イベントについて、深刻な選択を生徒・学生時代の早い時期から迫られるようになったとも言える。

近代社会において女性は、固定的性別役割分業体制にもとづく専業主婦としての生き方を強いられてきたが、ポストモダンの社会に移行する中で、その選択に際しては深刻な迷いを伴いつつも多様な生き方が可能となってきた。しかし日本においては、そうした女性の解放が

進む一方で、若い世代の女性の保守化傾向が指摘され、旧来の性別役割分業体制を肯定して専業主婦としての生き方を望み、可能となった多様な生き方をむしろ敬遠したり、職業的キャリアの積み重ねに消極的な意識が、若い世代の間では強いと言われている。こうした若い世代の女性の保守的なライフコース意識は、学校教育におけるキャリア教育あるいは進路指導の不十分さに起因しているのではないか。性別役割分業体制の檻の中で長い間自らのライフコースを真剣に考える機会を奪われてきた女性の特質を十分に考慮することなく、職業観や職業意識の形成を目指すキャリア教育を男子学生と同様に形式的かつ一律に女子学生に行おうとしたことの結果として、あるいは、専業主婦としての生き方を理想とする暗黙の価値観のもと、将来の職業選択を視野の内に入れることなく行われてきた進路指導の結果として、若い世代の女性の保守的なライフコース意識が生まれてきたのではないか。就職時に、結婚や出産というライフ・イベントについてどのように考えていくのか、あるいは、結婚や出産というライフ・イベントに直面した際に職業はどうするのかという選択を、早期段階から考えさせる必要があるのではないか。

近年、ニートやフリーターという言葉がマスメディアに多く取り上げられるようになり、学校でのキャリア教

*1 岐阜大学大学院カリキュラム開発専攻

*2 岐阜大学総合情報メディアセンター

育が注目を集めるようになった。キャリア教育とは、「児童生徒一人一人のキャリア発達を支援し、それぞれにふさわしいキャリアを形成していくために必要な意欲・態度を育てる教育」、「児童生徒一人一人の勤労観、職業観を育てる教育」と定義され、社会の激しい変化に流されることなく、それぞれが直面するであろう様々な課題に柔軟かつたくましく対応し、社会人・職業人として自立していくことができる児童生徒を育成することが目的とされている。しかし現実の学校では、高校や大学に進学するための進路指導に重点が置かれ、職業生活とは直接的に結び付かない知識・技能が教えられ、将来の職業生活や、人生の種々のライフ・イベントについて考える時間が十分に取られていない。そのため産業・経済の構造的変化、雇用の多様化・流動化などが進む現代において、児童生徒は、ライフコースを歩んでいく上で与えられた多くの選択肢を取捨選択する力が養われていない。

特に女性は、職業選択だけでなく、結婚や出産などの人生のライフ・イベントでも男性より多くの選択肢を与えられており、時代の変化に対応したライフコースの選択を柔軟にできるかどうか、今後の女性の人生のあり方を大きく左右することになる。進学が自らのライフコース設計に与える影響、就職先における一般職か総合職かというコース選択が与える影響、結婚時や出産時に職業を継続するかどうかという選択が人生に与える影響について、しっかりとした認識をもって選択していく力を、女性は生徒・学生時代に身に付ける必要がある。現代の女性だからこそ可能になっている多様な生き方についてしっかり理解し、自分がどのような生き方をしていくのかを考え、社会の変化に柔軟に対応する力を身につけることこそが、女性にとって求められていると言える。男性よりも多様なライフコースを選択できる女性が、多くの場合は男女共学である学校生活の中で、自分たちのライフコースの選択肢についてどのように考えていくことが望ましいか。男女共学の学校生活で女子に行うキャリア教育のカリキュラムについて、今日の時代背景の中で検討する。

II 方法

現在の高校生、大学生の進学・就職状況、学校で行わ

れるキャリア教育の実施状況については、文部科学省を初めとする各省庁が発行する白書や統計等の出版物、国立教育政策研究所による研究成果報告書等によってその概況は明らかになっている。しかし、現在の女性の進路選択や就職状況を詳細に検討する上では不十分などところが多い。そこで、現代の高校生が進学や就職、その際の学校や職業の選択、結婚や出産の選択など、今後の人生で起こる様々なイベントについてどのような選択が自分には望ましいと考えているのかを質問するアンケート調査を実施することとした。

1 調査対象

X 県内の県立公立共学高校 A 校（男子 190 名、女子 114 名）と、私立大学附属女子高校 B 校（女子 390 名）に在籍する高校 3 年生（合計 694 名）を対象にアンケート調査を行った。A 校は進学校であり、B 校は設置母体大学への進学を前提とした大学付属の高校である。両校とも卒業後の進路としては大学進学を前提としている。大手予備校等が発表している高校受験情報誌等による高等学校の偏差値ランキングによれば、一般入試では私立女子校 B 校の方が偏差値ランクが高いとされている。しかし、B 校は私立高校で、入学定員の半数以上を推薦入試で確保していること、付属の中学校からの無試験での進学者が多いこと等を踏まえると、A 校、B 校に入学する生徒の平均的な偏差値ランクに大差はないように思われる。

2 手続き

両校とも、無記名の質問紙法による学年単位の一斉調査を行った。実施は学級担任に依頼し、学級担任により行われた。調査期間は 2010 年 6 月から 7 月にかけてで、両校とも 1 学期の期末テストの答案返却の時間に実施を依頼した。普通科高校の A 校、B 校の高校 3 年生を対象に調査を実施したが、2 校の調査結果のみを検討することで、高校生一般の進路選択意識や職業選択意識、さらには将来のライフコースについての意識を考察することができるのかどうかという点については問題が残されていると言わざるをえない。専門高校、さらには、私立男子校等でも調査を実施するべきであったが、本調査では、共学校と女子校のみの比較とする。

3 質問紙の構成

現代の高校生が進学や就職、その際の学校や職業の選択、結婚や出産といったライフコースなど、これからの人生で起こる様々なイベントについて、どのような選択が自分には望ましいと考えているのかを調査するための質問紙を作成した。アンケート調査の調査票は、性別や学年などを尋ねる「Ⅰ. 自身について」、結婚・結婚生活や出産・育児に対しての関心や考えを尋ねる「Ⅱ. 将来の結婚観・家族観について」、学校・家庭生活で重きを置く点を尋ねる「Ⅲ. 自身の生活、学校生活について」、高校卒業後の進路についての関心や考え方を尋ねる「Ⅳ. 進路について」、職業に対する関心や考え方について尋ねる「Ⅴ. 将来の職業生活について」から構成されている。質問紙は B4 用紙の両面印刷で配布した。ⅠやⅡなど比較的答えやすいと思われる質問や、生徒が興味・関心を持ちそうな質問を初めに聞くことで、アンケートの無効票が少なくなるよう工夫した。多くの質問項目について、「あてはまる」、「ややあてはまる」、「どちらかといえばあてはまらない」、「あてはまらない」の4択で回答してもらう SD 法形式をとった。

Ⅲ 結果

1 進路希望・進学希望

小林雅之（小林雅之『進学格差』2008）が指摘するように、大学・短大・専門学校をあわせた進学希望には男女の割合の違いはほとんど見られないのに対し、大学とりわけ私立大学への進学希望者は女子で少なくなっているという。また、大学浪人が少ないことも女子の特徴として挙げられている。そこには性別だけでなく学力や親の所得階層等も影響を与えていることは推測されるが、高等教育を受ける機会の選択の際に性別による差があることは確かだと言える。男子では、学校卒業後一生涯職業を継続していくことが求められるが、女子では、必ずしも一生涯職業を継続していくことが求められていないという現状があり、そこから「男の子なら多少無理してでも四年制大学に進学させたいが、女の子であれば短大や専門学校でもかまわない」という意識の違いが生まれ、高等教育を与える機会の違いにつながっているのではないかと推測される。

今回の調査の結果では、進学を前提とした A 校、大学付属の B 校においては、卒業後の進路選択として、進学希望が多く見られ、就職希望者はほとんど見られなかった。（表 1）

表 1 卒業後の進路希望

| | | 進学 | 就 職 (アルバイト含む) | 就職も進学もしたくない | まだ考えていない | 未回答 | 総計 |
|-------|----|--------|------------------|-------------|----------|-------|---------|
| A 校男子 | 実数 | 181 | 4 | 2 | 2 | 1 | 190 |
| | 割合 | 95.26% | 2.11% | 1.05% | 1.05% | 0.53% | 100.00% |
| A 校女子 | 実数 | 113 | 0 | 1 | 0 | 0 | 114 |
| | 割合 | 99.12% | 0.00% | 0.88% | 0.00% | 0.00% | 100.00% |
| B 校女子 | 実数 | 384 | 3 | 1 | 2 | 0 | 390 |
| | 割合 | 98.46% | 0.77% | 0.26% | 0.51% | 0.00% | 100.00% |
| 総 計 | 実数 | 678 | 7 | 4 | 4 | 1 | 694 |
| | 割合 | 97.69% | 1.01% | 0.58% | 0.58% | 0.14% | 100.00% |

一方、具体的な進学先としては、小林（2008）が指摘するように、四年制大学への進学希望は、女子よりも男子で多くなっている（表 2）。

表 2 進学したい学校種

| | | 大学 | 短大 | 専門学校 | 決めていない | 未回答 | 総計 |
|-------|----|--------|-------|-------|--------|-------|---------|
| A 校男子 | 実数 | 179 | 0 | 2 | 0 | 0 | 181 |
| | 割合 | 98.90% | 0.00% | 1.10% | 0.00% | 0.00% | 100.00% |
| A 校女子 | 実数 | 99 | 4 | 6 | 2 | 2 | 113 |
| | 割合 | 87.61% | 3.54% | 5.31% | 1.77% | 1.77% | 100.00% |
| B 校女子 | 実数 | 371 | 2 | 6 | 1 | 4 | 384 |
| | 割合 | 96.61% | 0.52% | 1.56% | 0.26% | 1.04% | 100.00% |
| 総 計 | 実数 | 649 | 6 | 14 | 3 | 6 | 678 |
| | 割合 | 95.72% | 0.88% | 2.06% | 0.44% | 0.88% | 100.00% |

※B 校の設置母体大学に短期大学部はない。

2 進学したい理由

高校卒業後の上級学校への進学率が 75%を超える今日、調査を実施した A 校、B 校の進学希望者の割合は高い。それでは両校の生徒は、どのような理由で進学を希望しているのだろうか。高校卒業後の進路として進学を希望すると回答した生徒を対象に、進学したいと考える理由について尋ねた。

「将来学歴が必要だと思うから（表 3）」、「家族や先生がすすめるから（表 4）」に「あてはまる」と回答した割合は、女子と比べ男子で高くなっているのに対して、「大学や専門学校で学びたいことがあるから（表 5）」と回答した割合は、男子よりも女子で高くなっているという結果が示された。

小林（2008）が指摘するように、男子では、生涯職業を継続していくことを前提に、生涯継続しうる安定した職業に就くために必要な学歴獲得を目的に進学したいと考え、親や教師も学歴を重視し大学への進学を勧める。女子では、「大学や専門学校で学びたいことがあるから」という回答にみられるように、将来の職業生活も視野に入れながら、自分が興味・関心を持っていることを学ぶという具体的な目的を持ちながら進学を考える傾向があるのではないかと考えられる。

表 3 将来学歴が必要だと思うから

| | | あてはまる | あてはまらない | 未回答 | 総計 |
|-------|----|--------|---------|-------|---------|
| A 校男子 | 実数 | 169 | 10 | 2 | 181 |
| | 割合 | 93.37% | 5.52% | 1.10% | 100.00% |
| A 校女子 | 実数 | 99 | 14 | 0 | 113 |
| | 割合 | 87.61% | 12.39% | 0.00% | 100.00% |
| B 校女子 | 実数 | 343 | 30 | 11 | 384 |
| | 割合 | 89.32% | 7.81% | 2.86% | 100.00% |
| 総計 | 実数 | 611 | 54 | 13 | 678 |
| | 割合 | 90.12% | 7.96% | 1.92% | 100.00% |

表 4 家族や先生がすすめるから

| | | あてはまる | あてはまらない | 未回答 | 総計 |
|-------|----|--------|---------|-------|---------|
| A 校男子 | 実数 | 93 | 85 | 3 | 181 |
| | 割合 | 51.38% | 46.96% | 1.66% | 100.00% |
| A 校女子 | 実数 | 45 | 67 | 1 | 113 |
| | 割合 | 39.82% | 59.29% | 0.88% | 100.00% |
| B 校女子 | 実数 | 185 | 188 | 11 | 384 |
| | 割合 | 48.18% | 48.96% | 2.86% | 100.00% |
| 総計 | 実数 | 323 | 340 | 15 | 678 |
| | 割合 | 47.64% | 50.15% | 2.21% | 100.00% |

表 5 大学や専門学校で学びたいことがあるから

| | | あてはまる | あてはまらない | 未回答 | 総計 |
|-------|----|--------|---------|-------|---------|
| A 校男子 | 実数 | 131 | 46 | 4 | 181 |
| | 割合 | 72.38% | 25.41% | 2.21% | 100.00% |
| A 校女子 | 実数 | 103 | 9 | 1 | 113 |
| | 割合 | 91.15% | 7.96% | 0.88% | 100.00% |
| B 校女子 | 実数 | 332 | 44 | 8 | 384 |
| | 割合 | 86.46% | 11.46% | 2.08% | 100.00% |
| 総計 | 実数 | 566 | 99 | 13 | 678 |
| | 割合 | 83.48% | 14.60% | 1.92% | 100.00% |

表 6 結婚希望

| | | 結婚したい | 結婚したくない | 考えていない | 未回答 | 総計 |
|-------|----|--------|---------|--------|-------|---------|
| A 校男子 | 実数 | 125 | 20 | 44 | 1 | 190 |
| | 割合 | 65.79% | 10.53% | 23.16% | 0.53% | 100.00% |
| A 校女子 | 実数 | 81 | 17 | 14 | 2 | 114 |
| | 割合 | 71.05% | 14.91% | 12.28% | 1.75% | 100.00% |
| B 校女子 | 実数 | 324 | 35 | 30 | 1 | 390 |
| | 割合 | 83.08% | 8.97% | 7.69% | 0.26% | 100.00% |
| 総計 | 実数 | 530 | 72 | 88 | 4 | 694 |
| | 割合 | 76.37% | 10.37% | 12.68% | 0.58% | 100.00% |

3 結婚についての考え

これまでの社会では、ある一定の年齢に達すると結婚して家庭をもつことが通例とされており、結婚しない者は奇異の目でみられることとなったが、近年では男女ともに晩婚化が進み、今後さらなる非婚・未婚者の増加が見込まれている。

将来の結婚観について尋ねたアンケート調査の結果をみると、男子より女子で「結婚したい」と回答する割合が高く、結婚に対する希望が強いことが示された（表 6）。

表 7 結婚して初めて一人前だと思うから

| | | あてはまる | あてはまらない | 未回答 | 総計 |
|-------|----|--------|---------|-------|---------|
| A 校男子 | 実数 | 31 | 91 | 3 | 125 |
| | 割合 | 24.80% | 72.80% | 2.40% | 100.00% |
| A 校女子 | 実数 | 10 | 71 | 0 | 81 |
| | 割合 | 12.35% | 87.65% | 0.00% | 100.00% |
| B 校女子 | 実数 | 49 | 271 | 4 | 324 |
| | 割合 | 15.12% | 83.64% | 1.23% | 100.00% |
| 総計 | 実数 | 90 | 433 | 7 | 530 |
| | 割合 | 16.98% | 81.70% | 1.32% | 100.00% |

結婚したい理由として、男子では、「結婚して初めて一人前だと思うから（表 7）」に「あてはまる」と回答する割合が女子に比べ高く、一方女子では、「なんとなくあこがれるから（表 8）」、「相手に養ってもらいたいから（表 9）」に「あてはまる」と回答する割合が、男子に比べ高かった。男子で、「結婚して初めて一人前だと思うから」、が高い割合であったことは、男は結婚して妻子を養っていくことで一人前なのだという旧来の固定的な性別役割分業観や結婚観が、男子高校生の間になお根強いことがうかがえる。また、女子で、「相手に養ってもらいた

表 8 なんとなくあこがれるから

| | | あてはまる | あてはまらない | 未回答 | 総計 |
|-------|----|--------|---------|-------|---------|
| A 校男子 | 実数 | 84 | 37 | 4 | 125 |
| | 割合 | 67.20% | 29.60% | 3.20% | 100.00% |
| A 校女子 | 実数 | 63 | 18 | 0 | 81 |
| | 割合 | 77.78% | 22.22% | 0.00% | 100.00% |
| B 校女子 | 実数 | 253 | 68 | 3 | 324 |
| | 割合 | 78.09% | 20.99% | 0.93% | 100.00% |
| 総計 | 実数 | 400 | 123 | 7 | 530 |
| | 割合 | 75.47% | 23.21% | 1.32% | 100.00% |

表 9 相手に養ってもらいたいから

| | | あてはまる | あてはまらない | 未回答 | 総計 |
|-------|----|--------|---------|-------|---------|
| A 校男子 | 実数 | 27 | 95 | 3 | 125 |
| | 割合 | 21.60% | 76.00% | 2.40% | 100.00% |
| A 校女子 | 実数 | 34 | 47 | 0 | 81 |
| | 割合 | 41.98% | 58.02% | 0.00% | 100.00% |
| B 校女子 | 実数 | 157 | 166 | 1 | 324 |
| | 割合 | 48.46% | 51.23% | 0.31% | 100.00% |
| 総計 | 実数 | 218 | 308 | 4 | 530 |
| | 割合 | 41.13% | 58.11% | 0.75% | 100.00% |

いから」が高い割合であったことは、女は結婚して専業主婦として夫に養ってもらうものなのだという旧来の固定的な性別役割分業観や結婚観が、高校生の間になお残されているということがうかがえる。

これまでの社会では、男女の賃金格差や雇用状況を考えると、女性は生涯職業を継続していくことが難しいという現実があり、結婚することで生涯安定して生活することができた。しかし、男女共同参画社会の形成を目指す種々の改革が進められたことで、今日では女性も生涯職業を継続していくことが可能になりつつあるのだとも言える。とはいえ、伝統的な性別役割分業観や結婚観は人々の間に依然として残されているところがあり、結婚や出産が職業継続のための阻害要因となる場合もある。結婚したい理由として「なんとなくあこがれる」に「あてはまる」と回答した割合が高かったことからわかるように、現代の女子高校生は旧来の性別役割分業観や結婚観に基づいた意識から結婚を希望している傾向があり、結婚後もそれ以前と変わらず職業を継続していくことが難しいという現実や、結婚が必ずしも旧来の

ような生涯安定した生活を保障するものになっていないという現実をリアルにとらえることができていないと言える。

ただし、男子で「相手に養ってもらいたいから」に「あてはまる」と回答している割合が 20%強あることと、女子で「相手に養ってもらいたいから」に「あてはまらない」と回答する割合が 50%強あることを考えると、「男は外で仕事、女は内で家事・育児」という旧来の固定的な性別役割分業観や結婚観は薄れつつあり、男性が家事・育児を行うことや、女性が生涯職業を継続していくことが、必ずしも奇異の目にさらされるわけではないという状況が示されているとも解釈できる。

4 子どもを持つことについての考え

「3 結婚についての考え」で取り上げた、結婚したい理由について、「子どもがほしいから（表 10）」にあてはまると回答した割合に、性別による違いは示されなかった。

表 10 子どもがほしいから

| | | あてはまる | あてはまらない | 未回答 | 総計 |
|-------|----|--------|---------|-------|---------|
| A 校男子 | 実数 | 107 | 15 | 3 | 125 |
| | 割合 | 85.60% | 12.00% | 2.40% | 100.00% |
| A 校女子 | 実数 | 70 | 11 | 0 | 81 |
| | 割合 | 86.42% | 13.58% | 0.00% | 100.00% |
| B 校女子 | 実数 | 276 | 46 | 2 | 324 |
| | 割合 | 85.19% | 14.20% | 0.62% | 100.00% |
| 総計 | 実数 | 453 | 72 | 5 | 530 |
| | 割合 | 85.47% | 13.58% | 0.94% | 100.00% |

しかし、将来ほしい子どもの数について尋ねた質問項目「将来子どもはほしいと思いますか。また、ほしいと思う人は何人ほしいと思いますか。（表 11）」では、男子で「まだわからない」と回答している割合が女子に比べ高く、女子では「ほしくない」、「2 人」と回答した割合が男子に比べ高かった。すなわち女子では、将来子どもを産みたいか、あるいは何人産みたいかという出産に関するイメージを既に明確に持っているという傾向があることが示された。

「3 結婚についての考え」で取り上げた結婚希望を尋ねた表 6 をみると、「結婚したい」と回答した生徒の割

表 11 将来ほしい子どもの数

| | | ほしくない | 1人 | 2人 | 3人以上 | まだわからない | 未回答 | 総計 |
|------|----|-------|--------|--------|--------|---------|-------|---------|
| A校男子 | 実数 | 7 | 16 | 98 | 28 | 40 | 1 | 190 |
| | 割合 | 3.68% | 8.42% | 51.58% | 14.74% | 21.05% | 0.53% | 100.00% |
| A校女子 | 実数 | 8 | 7 | 76 | 8 | 14 | 1 | 114 |
| | 割合 | 7.02% | 6.14% | 66.67% | 7.02% | 12.28% | 0.88% | 100.00% |
| B校女子 | 実数 | 23 | 39 | 218 | 54 | 55 | 1 | 390 |
| | 割合 | 5.90% | 10.00% | 55.90% | 13.85% | 14.10% | 0.26% | 100.00% |
| 総計 | 実数 | 38 | 62 | 392 | 90 | 109 | 3 | 694 |
| | 割合 | 5.48% | 8.93% | 56.48% | 12.97% | 15.71% | 0.43% | 100.00% |

合は、A校男子で約65%、A校女子で約70%、B校女子で約80%であった。一方、将来ほしい子どもの数について尋ねた質問項目（表11）で「1人」、「2人」、「3人以上」と回答した、将来子どもがほしいと考えている生徒の割合は、男子で約75%、A校・B校女子で約80%であった。すなわち、将来結婚したいと考えている生徒よりも、将来具子どもを持つことを具体的にイメージしている生徒の割合の方が高いという結果が示された。これらの結果から、結婚はしたくないが、子どもはほしいと回答した者が一定数存在することが明らかになった。子どもは結婚した夫婦が設けるものであるという考え方が根強い日本において、出産が結婚より後に起こりうるライフ・イベントであるという旧来の考え方が現代の高校生たちの間で薄れつつあり、結婚と出産が必ずしも結びつくものではないという考え方が定着しつつあるとも言える。

5 ワークライフバランスについての考え

近代家族成立以降、女性は結婚すると専業主婦となり家庭内で家事や育児を担うことが通例とされてきたが、男女雇用機会均等法の成立や、パートタイム労働法等の施行を受けて、現実には厳しい状況はあるものの、結婚あるいは出産後も職業を継続していくことが可能となりつつある。

ワークライフバランスについての考えを尋ねるために、「将来、（自分の職業生活）と（結婚相手との生活）について、どちらを優先させたいと思いますか.」、「将来、（自分の職業生活）と（子どもの育児や教育）について、どちらを優先させたいと思いますか.」と別々に尋ね、「職業優先」、「どちらかといえば職業優先」、「どちらかといえば結婚生活優先（子どもの育児や教育優先）」、「結

婚生活優先（子どもの育児や教育優先）」の4択で回答を求めた。集計は2択で行った。

アンケート調査の職業と結婚生活の優先度について尋ねた質問（表12）については、結婚生活優先と回答した生徒の割合は、A校男子で58%、A校女子で51%、B校女子で59%と、男子・女子ともに、半数以上の生徒が職業よりも結婚生活を優先したいと回答している。性別による違いはみられなかった。女子と同様に男子でも、職業よりも結婚生活を優先すると回答する割合が高かったことは、結婚後は「男は外で仕事、女は内で家事育児」という旧来の性別役割分業意識が現代の男子高校生の中で一定薄れつつあることが示されたのではないだろうか。

表 12 職業生活と結婚生活の優先度

| | | 職業優先 | 結婚優先 | 未回答 | 総計 |
|------|----|--------|--------|-------|---------|
| A校男子 | 実数 | 77 | 111 | 2 | 190 |
| | 割合 | 40.53% | 58.42% | 1.05% | 100.00% |
| A校女子 | 実数 | 54 | 58 | 2 | 114 |
| | 割合 | 47.37% | 50.88% | 1.75% | 100.00% |
| B校女子 | 実数 | 155 | 232 | 3 | 390 |
| | 割合 | 39.74% | 59.49% | 0.77% | 100.00% |
| 総計 | 実数 | 286 | 401 | 7 | 694 |
| | 割合 | 41.21% | 57.78% | 1.01% | 100.00% |

一方、職業と子どもの育児や教育の優先度について尋ねた質問（表13）では、子どもの育児や教育優先と回答した割合は、A校男子で62%、A校女子で88%、B校女子で85%と性別による違いがみられた。男女ともに、職業と結婚生活の優先度を尋ねた項目で結婚生活優先と回答した者の割合と比べ、職業と子どもの育児や教育

表 13 職業生活と子どもの育児や教育の優先度

| | | 職業優先 | 子ども優先 | 未回答 | 総計 |
|------|----|--------|--------|-------|---------|
| A校男子 | 実数 | 70 | 117 | 3 | 190 |
| | 割合 | 36.84% | 61.58% | 1.58% | 100.00% |
| A校女子 | 実数 | 13 | 100 | 1 | 114 |
| | 割合 | 11.40% | 87.72% | 0.88% | 100.00% |
| B校女子 | 実数 | 57 | 333 | 0 | 390 |
| | 割合 | 14.62% | 85.38% | 0.00% | 100.00% |
| 総計 | 実数 | 140 | 550 | 4 | 694 |
| | 割合 | 20.17% | 79.25% | 0.58% | 100.00% |

の優先度を尋ねた質問項目では、子どもの育児や教育優先と回答する割合が高くなっている。とはいえ、男子では、結婚生活優先と回答した割合よりも子どもの育児や教育を優先と回答した割合が4%高くなっているにとどまったのに対し、女子では、結婚生活優先と回答した割合よりも子どもの育児や教育優先すると回答した割合が、A校女子では37%、B校女子でも26%高くなっており、相手との結婚生活を優先する以上に子どもの育児や教育を優先させたいと希望を持つ生徒は男子よりも女子で多くみられた。

これらの2つ質問項目の回答結果をみると、現代の高校生が、結婚生活以上に子どもの育児や教育をさらに優先させるべきであると考えていることがうかがえる。そして男子よりも女子で、職業より子どもの育児や教育を優先させたいとする意向が強くみられた。こうした結果をみると、子どもの育児や教育は女性が行うべきであるという旧来の固定的な性別役割分業観が、現代の高校生、とりわけ女子生徒の間で強く保持されているという傾向が示されたといえるであろう。その一方で、A校男子において、職業よりも子どもの育児や教育を優先したいと回答する生徒の割合が60%を超えるなど、積極的に子どもの育児や教育に参加していきたいという希望を持っているという結果が示された。職業と結婚生活や子どもの育児や教育の優先度において職業よりも家庭生活を優先したいと回答する割合が女子だけでなく男子でも高くみられたこと考え合わせるならば、今日、内閣府を中心に職業と家庭生活の両立を実現するために提唱されている「ワークライフバランス」という考え方が、現代の高校生の間にも浸透しつつあることが示されたのではないだろうか。

6 職業についての考え

経済・社会情勢や雇用情勢の変化の中で、正規雇用に就くことができず、無業者あるいはフリーターの増加や、就職後の高い離職率が問題視され、早期段階から系統的に職業観・勤労観を身に付けさせることが求められている。高等教育機関への進学率が75%を超え、多くの生徒にとって高校が高等教育機関への「通過点」となり、進路意識や目的意識が希薄なまま進学する者が増加していることが今日指摘されている。そのため、高校段階か

表 14 休みが多い仕事

| | | あてはまる | あてはまらない | 未回答 | 総計 |
|------|----|--------|---------|-------|---------|
| A校男子 | 実数 | 130 | 57 | 3 | 190 |
| | 割合 | 68.42% | 30.00% | 1.58% | 100.00% |
| A校女子 | 実数 | 54 | 60 | 0 | 114 |
| | 割合 | 47.37% | 52.63% | 0.00% | 100.00% |
| B校女子 | 実数 | 213 | 176 | 1 | 390 |
| | 割合 | 54.62% | 45.13% | 0.26% | 100.00% |
| 総計 | 実数 | 397 | 293 | 4 | 694 |
| | 割合 | 57.20% | 42.22% | 0.58% | 100.00% |

表 15 有名な会社での仕事

| | | あてはまる | あてはまらない | 未回答 | 総計 |
|------|----|--------|---------|-------|---------|
| A校男子 | 実数 | 121 | 65 | 4 | 190 |
| | 割合 | 63.68% | 34.21% | 2.11% | 100.00% |
| A校女子 | 実数 | 62 | 52 | 0 | 114 |
| | 割合 | 54.39% | 45.61% | 0.00% | 100.00% |
| B校女子 | 実数 | 232 | 155 | 3 | 390 |
| | 割合 | 59.49% | 39.74% | 0.77% | 100.00% |
| 総計 | 実数 | 415 | 272 | 7 | 694 |
| | 割合 | 59.80% | 39.19% | 1.01% | 100.00% |

表 16 おもしろい、興味がもてる仕事

| | | あてはまる | あてはまらない | 未回答 | 総計 |
|------|----|--------|---------|-------|---------|
| A校男子 | 実数 | 180 | 6 | 4 | 190 |
| | 割合 | 94.74% | 3.16% | 2.11% | 100.00% |
| A校女子 | 実数 | 112 | 1 | 1 | 114 |
| | 割合 | 98.25% | 0.88% | 0.88% | 100.00% |
| B校女子 | 実数 | 384 | 6 | 0 | 390 |
| | 割合 | 98.46% | 1.54% | 0.00% | 100.00% |
| 総計 | 実数 | 676 | 13 | 5 | 694 |
| | 割合 | 97.41% | 1.87% | 0.72% | 100.00% |

ら進学希望者に対しても働くことの意義や意識を考えさせるとともに、「大学の向こう側にある社会」を意識させ、自己の将来について考えることが重要であると指摘されている。

アンケート調査では、「将来どのような仕事につきたいと思っていますか。」と尋ね、高校生が就きたいと思われる仕事の条件を提示し、それぞれの項目について「あてはまる」、「どちらかといえばあてはまる」、「どちらかといえばあてはまらない」、「あてはまらない」の4

表 17 の役に立つ仕事

| | | あてはまる | あてはまらない | 未回答 | 総計 |
|-------|----|--------|---------|-------|---------|
| A 校男子 | 実数 | 134 | 53 | 3 | 190 |
| | 割合 | 70.53% | 27.89% | 1.58% | 100.00% |
| A 校女子 | 実数 | 93 | 20 | 1 | 114 |
| | 割合 | 81.58% | 17.54% | 0.88% | 100.00% |
| B 校女子 | 実数 | 321 | 66 | 3 | 390 |
| | 割合 | 82.31% | 16.92% | 0.77% | 100.00% |
| 総計 | 実数 | 548 | 139 | 7 | 694 |
| | 割合 | 78.96% | 20.03% | 1.01% | 100.00% |

表 18 たくさんの人とかかわれる仕事

| | | あてはまる | あてはまらない | 未回答 | 総計 |
|-------|----|--------|---------|-------|---------|
| A 校男子 | 実数 | 123 | 63 | 4 | 190 |
| | 割合 | 64.74% | 33.16% | 2.11% | 100.00% |
| A 校女子 | 実数 | 87 | 26 | 1 | 114 |
| | 割合 | 76.32% | 22.81% | 0.88% | 100.00% |
| B 校女子 | 実数 | 316 | 73 | 1 | 390 |
| | 割合 | 81.03% | 18.72% | 0.26% | 100.00% |
| 総計 | 実数 | 526 | 162 | 6 | 694 |
| | 割合 | 75.79% | 23.34% | 0.86% | 100.00% |

択で回答を求め、2 択で集計した。将来の職業生活について尋ねた質問の結果をみると、男子では「休みが多い仕事（表 14）」、「有名な会社での仕事（表 15）」を重視する傾向が示された。女子では、「おもしろい、興味をもてる仕事（表 16）」、「人の役に立つ仕事（表 17）」、「たくさんの人とかかわれる仕事（表 18）」を重視する傾向が示された。これらの結果をみると、男子では仕事内容そのものではなく労働条件を重視し、女子では仕事そのものの内容を重視しているという結果が示されたと言えるであろう。

7 高校生のライフコース意識の問題点

アンケート調査を実施したことにより、現代の高校生の職業選択や結婚、出産と言ったライフコースに関する意識について、性別による考え方の違いが示された。男子ではライフ・イベントに左右されことなく、一生涯職業を継続していくことが前提となっており、女子では、職業を継続していきたいという考えもみられるものの、出産したならば、職業よりも子どもの育児や教育を優先

させていきたいという考えを持っているという傾向が示された。このことは、男女の平等を建前とした学校教育において、これまでの性別によるライフコースの違いについてほとんど考慮することなく、同一かつ一律に将来の職業についてのみ考えさせるキャリア教育を実施してきたことが強く影響したのではないかと考えられる。また、男子と比べ女子では、自分の興味や関心から上級学校への進学を考える傾向が示され、キャリア教育で行われている自身の興味・関心にもとづいた進路選択が、男子生徒に比べ女子生徒において受け入れられていることがうかがえる。さらに女子では、結婚に対する希望やあこがれ、あるいは子どもの育児や教育に対する責任感が強く、将来の家庭生活の充実も願っているという傾向が示された。今日の日本の社会においては、自身の興味や関心にもとづいた職業選択をしつつ、結婚や家庭生活の充実も希望するという多くの女子が希望するライフコースを歩むことは現実的には困難が多く、どちらか一方を選ばざるを得ないというところにこれまで追い込まれてきたという現実がある。少子化や未婚・晩婚化や非婚化が社会的な問題となり、関心が高まっている今日において、結婚や出産、それらが自身のライフコースに与える影響について、これらのライフ・イベントによって人生が大きく左右されるであろう女子だけでなく、今後の男女共同参画社会を担っていく男子でも考えていくことが求められるのではないだろうか。

8 研究のまとめと今後の課題

生き方について考えることが目的であるキャリア教育では、人生の様々なライフ・イベントを考慮し、ライフコース選択の可能性を考える機会を設けることが求められると考える。特に、就職や結婚、出産は生徒・学生から見ても身近で、人生を左右する可能性のある大きなライフ・イベントであり、女子生徒・学生にとっては男子生徒・学生以上に人生を左右する可能性が高い。このような妊娠・出産等のライフ・イベントや社会での処遇のされ方が異なる男女を形式的に同一に扱うことは難しいと思われるにもかかわらず、今日の学校教育では、これまでの女性の生き方や女性特有のライフ・イベントについて考慮されることなく、教育が行われている。とりわけ、キャリア教育においては、職業についてのみ考

えるのではなく、職業と結婚や出産といった家庭生活を一本のライフコースとして考えていくことで、自身のライフコースだけでなく、職業についてもより現実的な選択が可能となるのではないだろうか。これらの課題について十分考えさせることなく職業についてのみ考えさせようとした結果として、職業と家庭生活のバランスを図ることができず、今日問題とされているような未婚・晩婚化、非婚化、さらには少子化といった問題が表れているのではないだろうか。今後のキャリア教育においては、これまでの社会において成立していた性別役割分業観や、現在の性別による処遇のされ方の違い等、性別の持つ意味や性別が果たしてきた役割についてしっかりとした認識を持ち、職業だけでなく結婚や出産といった家族観が養われるような、職業と家庭生活のバランスを考えていくことが求められるのではないかと筆者としては考える。

参考・引用文献

- ・ 荒川葉 2009『「夢追い」型進路形成の功罪—高校改革の社会学—』東信堂。
- ・ 本田由紀 2009『教育の職業的意義 —若者，学校，社会をつなぐ』筑摩書房。
- ・ 一番ヶ瀬康子 2003『論集 女性解放における福祉と教育問題 第2巻 女性の主体形成と男女共同参画社会』ドメス出版。
- ・ 吉川徹 2009『学歴分断社会』ちくま新書。
- ・ 小林雅之 2008『進学格差—深刻化する教育費負担』筑摩書房。
- ・ 国立教育政策研究所 2007『キャリア教育への招待』東洋館出版社。
- ・ 厚生労働省 2007『平成 19 年度 雇用均等基本調査』。
- ・ 厚生労働省 2007『平成 19 年度版 労働経済白書 ワークライフバランスと雇用システム』。
- ・ 文部科学省 2006『小学校・中学校・高等学校 キャリア教育推進の手引 —児童生徒一人一人の勤労観，職業観を育てるために—』。
- ・ 内閣府 2009『平成 21 年度版 男女共同参画白書』。
- ・ 内閣府男女共同参画局 2009『男女のライフスタイルに関する意識調査』。